

認識的プラグマティズムの擁護とその含意

植原 亮

一 はじめに——分析的認識論への疑念

われわれは賢くありたいものである。そして、賢くあるうとするならば、いかにして認識を行うべきかという問いが付きまとうことになる。さらに、この問いに答えるためには、認識プロセスのよしあしを判定するための基準についても頭を悩ませなくてはならない。

認識の規範的次元に関わるこうした問題に答えを与えようとする認識論を、単に認識の過程の記述を旨指す「記述的認識論 descriptive epistemology」と區別して、「規範的認識論 normative epistemology」と呼ぶ⁽¹⁾。規範的認識論の目的は、信念の形成や保持といった認識プロセスを評価する基準とそれに基づく認識上の規範を提示することである。

規範的認識論の一種である「分析的認識論 analytic epistemology」によると、概念分析を通じて認識的な規範性の概念や認識評価の基準を取り出すことによって、認識的規範性をめぐる問題に答えることができるという。認識に関するさまざまな日常的・直観的判断のうちには、共通の概念的な核が存在し、理論的な定式化を通じてそれを

明示的に取り出すことが可能である⁽³⁾。そして、認識的な規範概念がいったん明示化されれば、それを認識プロセスの評価基準として用いることができるというわけである⁽³⁾。

しかしここに、深刻な困難が立ちはだかる⁽⁴⁾。分析的認識論には、概念分析の結果として提示される認識的な規範概念や評価基準がなぜ価値ある重要なものなのか、どうしてそうした基準を採用すべきなのか、といったことを十分に説明することができないのである。分析的認識論は、認識評価基準の採用は、それが概念分析を通じて導き出されたということによって正当化されると主張するだろう。確かに、信頼性主義の採用を正当化しようというゴールドマンの試み⁽⁵⁾は、分析的認識論の白眉といえるものであり、認識的な規範に関わる直観をこのうえなく整合的に表明しようとしたものだともなすことが可能である。だが、そうした整合的な定式化が、特定の時代・文化に属する人間の認識的な規範概念を明らかにするという作業以上のものだといえるかどうかについては疑問が生じる。いいかえると、分析的認識論は、認知人類学としては面白い報告をするかもしれないにせよ、特定の集団の中で優勢であるような認識的な規範概念ないし認識評価の基準を提示するにとどまりかねないのである。そして、もしそうであるならば、他の集団において採用されている認識評価基準を退ける決定的な理由はないのであるから、分析的認識論が推奨するような認識プロセスを採用すべき単純な理由は見当たらない。極端な場合、分析的認識論は個人にとって価値のあるものを何ら提供しないであろう。

ここで、認識と価値との関わりについて論じるための足場を築いておこう。価値を「内在的価値 intrinsic value」と「道具的価値 instrumental value」に区分する。内在的価値とは、人があるものに対してそれ自体に価値を見出すものである。内在的価値が宿っていると考えるのが自然なものとして、例えば、生存・健康・幸福などを挙げることができるだろう。次に、道具的価値を有しているとは、人が価値をおくものを獲得するための手段として役立つということを意味する。つまり、貨幣が典型的なのだが、直接・間接に内在的価値を獲得するのに貢献するのが、

道具的価値をもつということである。

こうした語を用いるならば、分析的認識論に対する疑念は、次のように述べ直すことができる。すなわち、それが提示する認識的な規範概念や評価基準によって是認される信念や認識プロセスに内在的価値を見出しうるとは考えにくく、また、それらが道具的価値を有しているといえるための理由を明らかにすることも難しい。そもそも道具的価値に関しては、何が認識の目的であるのかを確定しない限り、有効な議論は展開できないであろう。

では、真理を認識の目的とする考え方はどうだろうか。実のところ、真理を認識の目標に掲げることが、概念分析を探求の中心にすえることに付随する分析的認識論の大きな特徴なのである。この考えに基づくならば、時代や文化の影響から自由な、恣意的ではない認識評価の基準が定式化できるようにも思われる。しかし、分析的認識論において真理が認識の目標として設定されるべき理由については、説明がなされるにしても、認識の目的が真理であることは概念分析の結果として判明するのだという、概念分析の有効性に大きく依存した説明だったのが実情である。そして、概念分析という手法に疑義が呈されるときにも、真理が果たして認識にとつて価値のあるものなのかどうかという問いも盛んに発せられている⁶⁾。特に、スティッチは、思考の言語仮説や指示の因果説に基づく意味論を構成し、そこで示される真理概念の恣意性や局所性を強調することによって、真理は内在的な価値をもつとはいえないと結論する。残る道は、真理が道具的価値を有することを示すことだが、そうした議論は今のところ存在しないとスティッチは述べている (Stich 1990, ch. 5)。

本稿は、分析的認識論に代わる認識論のひとつを擁護し、その含意を汲み出すことを目標とする⁷⁾。それは最初、まったく真理を歯牙にかけないかのように見える。しかし、擁護を通じ修正や補強を行うことによって、古典的なプラグマティズムに合致するような真理観が要請されることが明らかになるだろう。そして、そこには、観想的で個人主義的な認識論の伝統から脱却していく新しい認識論が立ち現れてくるはずである。

二 認知的プラグマティズム

この節では、概念分析を主要な方法とせず、また認識の目標を真理であると規定することのない規範的認識論の一形態として、スティッチが提唱する「認知的プラグマティズム epistemic pragmatism」を取り上げる。認知的プラグマティズムが規範的認識論であるのは、認識プロセスの評価基準を提示し、またその基準にかなった認識プロセスを推奨することによって、いかにして認識するべきかという問いに答えるからである⁸⁾。そして、認知的プラグマティズムの大枠を示したあとは、その帰結を簡単に述べ、分析的認識論に対して優位に立っている点を押さえたい。

二・一 認知的プラグマティズムの姿

前節での議論を受けて、分析的認識論が推奨する認識プロセスに内在的な価値を見出しがたいという可能性があるということを認めたでしょう。しかし、なおも、その認識プロセスが、自分が内在的に評価するものへと導いてくれるのかどうか、あるいは、ほかの認識プロセスを用いたときに比べて、自分の目標へ到達しやすいか否かは考慮に値する。このことから、認識プロセスを評価する際に重要なのは、道具的な価値やそれがもたらす帰結に注目することだといえる⁹⁾ (Stich 1990, pp. 129-131)。

帰結主義的な観点を出発点とすると、終点にはどのような姿の評価基準が現れるだろうか。プラグマティズムの伝統の通り、認識プロセスをさまざまな目標達成のために利用される道具や技術の一つであると見なすことから第一歩を踏み出そう。ここでの道具や技術という語は、大工道具から経済政策までも含む幅広い対象を指示する (Stich 1990, p. 131)。

次の一步は、道具の評価は、個人が内在的な価値を見出すものをもたらす度合いによって可能であるという方針を採用することである。これによって、帰結主義の内実がより鮮明になるだろう。評価は「費用便益分析 cost-benefit analysis」により算出される期待値に基づいて行われる。選択肢がもたらしうる帰結をリストアップし、それぞれの帰結が生じる確率を求める。これらの確率と、それぞれの帰結が有する価値の重みを表す数との積の総和が、個々の選択肢の期待値である (Stich 1990, p. 133)。以上が、費用便益分析に関するスティッチの説明だが、価値あるいは便益の扱いは触れられているものの、費用がどのように分析に組み込まれているのかははっきりしない。そこで、簡単であるが、便益をプラスの数で表すのに対して、費用は負の価値をもつとしてマイナスの数で表せば、期待値の計算に組み入れることが可能になる。なお、金銭的な費用に限らず、時間や人的資源などの諸費用も「費用」のうちである。

認識プロセスを道具や技術の一つとみなし、費用便益分析を適用することによって至るのは、次のような認識評価の基準である。すなわち、認識プロセスの評価は、それが形成する信念がもたらす帰結がもつ内在的な価値の期待値を基準に行われる。そして、認識的プラグマティズムは、最も期待値が大きい認識プロセスを推奨することによって、いかに認識するべきかという問いに答えるのである⁽¹⁰⁾。

二・二 二つの帰結

(1) 規範的認知多元主義 認識的プラグマティズムに立脚するならば、どのような道具・技術を受け入れるのかは、何にどのくらい内在的価値を見出すのが個人によって異なるのと同じくらい多様でありうるのだと結論できよう。この結論は、人々が用いるべき唯一の認識プロセスなるものは存在しないということを意味している。同一の認識プロセスであっても個人によって評価が分かれるからである。スティッチはこの帰結に、「規範的認知多

元主義 normative cognitive pluralism」を名付けている (Stich 1990, pp. 135-140)。いかに認識すべきなのは、人によって違うのである。

認識の評価には費用を考慮に入れなくてはならないという観点を掘り下げることによって、規範的認知多元主義の中身にさらに踏み込もう。重要なのは、費用の考慮によって、認識的プラグマティズムが「実行可能性 (feasibility)」を加味した評価体系として特徴づけられるという点である⁽¹¹⁾。この特徴は、ある認識プロセスの論理的な成立可能性は採用に直結しないという洞察によって支えられおり、諸費用がかかりすぎて現実には実行不可能な認識プロセスは排除されるということを示している。例えば、全ての証拠に基づいて推論を行うように教える規範に従うことは、論理的には可能だとしても、現実の人間の脳には記憶の負担や時間がかかりすぎるために、つまり費用をまかなうことができないために、実際上は実行することは不可能だと思われる⁽¹²⁾。したがって、このような規範にのっとった認識プロセスは採用すべきではない。従来の認識論は、多元主義を認めてこなかったという意味で、もとの嫌いな人にも、もちを薦めかねないものであった。それどころか、実行可能性を考慮しないという意味で、そもそも、そのもちは、絵に画いたもちだったかもしれないのである。

費用を考慮するということは、結局のところ、どのような制約のもとで目的の実現をはかるのかということを考慮することにほかならない。道具や技術を評価するには、それに要する予算・時間・資源・能力などの諸費用に関して十分な把握がなされていなければならぬのである。逆に、どのような認識プロセスがよいかという問いを立てたときに、認識プロセスを使用して目的の実現をはかる際の個々の場面での制約が明らかではない限り、議論の焦点はぼやけ、問いには現金価値が伴わない⁽¹³⁾。

実行可能性や費用についてのそのような考察の結果、規範的認知多元主義の中身もいっそう明瞭になる。内在的価値の多元性、各人の内在的価値に対する重み付けの相違、個々の場面における制約の個人ごとの多様性、この三

点ゆえに、認識評価は多元主義的にならざるをえないのである。

私は、認知多元主義から次のような教訓を引き出したい。これまでの認識論は、内在的価値の多元性や個人に課されている制約を無視して、特定の人々（哲学者）の直観にかなうような、しかも実際には従うことが難しい一定の規範を押し付けてきた。しかし、認知多元主義の観点からすると、認識論が提示すべきなのは、個人と状況にオン・デマンドな規範なのである。

(2) 知性改善論 認識的プラグマティズムに従った場合、知性改善はどのように行われるだろうか (Stich 1990, pp. 155-158)。もたらされる内在的価値の期待値が大きく、しかも実行可能な認識プロセスを確定したい。そのためには、何が制約ないし費用として存在するのかわをはっきりさせる必要がある。

知性改善のためには、教授や習得が可能であるということが重要な制約として働く。この条件を満たさない認識プロセスは、天分や悟りのようなものなしには獲得の見込みはないという点で、望ましくはあっても実際上は実行不可能な認識プロセスといえるだろう。(もちろん、だれにでも悟りが開ける方法が発見されたというなら話は別で、積極的に取り込むべき方法となる。)

伝授や習得が可能でなくてはならないということが確認されたならば、次に取り組むべきことが決まる。それは、教育方法に関する種々の知見に耳を傾けることである。どの方法がどのような条件下でどの程度の効果を発揮するのかということは経験的探求の結果として判明する。この探求は、学習のメカニズムに関する科学や、教育制度・教育施設に関する研究などと合同で行われるべきであるとステイチは説く⁽¹⁴⁾。

こうして、獲得可能な認識プロセスが確定され、それに照らして現状での認識プロセスの評価を行うことができようになる⁽¹⁵⁾。同時に、どのように改善をはかるべきかという処方箋も示される。以下は、知性改善の過程である。認識的プラグマティズムにのっとり、ある時点で知性改善が進行したとする。すると、これに伴って、様々

な経験的探求や技術的改良が生じるであろう。その結果、各個人に関する知性改善の実行可能性条件が異なってくる。再び認識評価が行われ、それに基づいてさらなる改善が重ねられていく。こうした過程が際限なく続くことになるという側面を取り上げても、ただひとつ求められるべき知性のあり方といったものは——生物が進化の果てに到達すべき唯一の種など存在しないのと同じく——存在しないということが見て取れるであろう⁽¹⁶⁾。

二・三 分析的認識論に比べてどこが優位か

認識的プラグマティズムにとって、真理は必須の目標ではない。この際立った特徴は、真なる信念の産出を目標とする装置として認識プロセスを捉える分析的認識論に顕著な考え方からの脱却を示している。プラグマティズムを採用すると、道具や技術は目標に貢献する度合いが評価に大きな影響を与えるが、このとき、認識の目標は多様であり、唯一に定まっているわけではない。したがって、認識の目標を真理に固定する必要はないのである。真理をこうして扱うことには、次のような長所がある。

無条件に真理に価値を認めてきた分析的認識論には、規範の重要性を十分に説明するという点において困難が存する。規範に従うことが真理の獲得に貢献するとしても、真理が有する価値については何ら明らかではないままなのである。コーンブリスによると、ステイチチの提案は、規範に従うことがなぜよいことなのかを説明することにも成功している (Kornblith 2002, pp. 145-146)。ステイチチの提案では、規範に従うこと、すなわち認識的プラグマティズムが推奨する認識プロセスを採用することは、個人が内在的に評価し、欲求を抱くものの獲得につながる。認識的な規範が有する、人に従わせるように働く力について、主体の欲求に基づいた自然な説明が与えられているのである。かくして、認識的プラグマティズムは、現在われわれが抱いている規範概念を明らかにすることができてもその概念のもつ価値を説明することができないという分析的認識論の弱点を克服しているといえるだろう。

分析的認識論のもとで進められる知性改善は、自文化における認識的規範性を追認する形に陥りやすいと思われる。なぜなら、分析的認識論は、いったん認識的な評価概念を概念分析によって定式化してしまうと、それを改訂する契機に欠けるからである。これに対し認識的プラグマティズムは、認識に関わる規範概念や評価基準を改良する方向での知性改善が可能なのである。

三 批判と含意——状況内行為と共同体

これまで述べてきたような認識的プラグマティズムに問題はないだろうか。特に気がかりなのは、認識的プラグマティズムが、第一節で見たような、真理に内在的価値のみならず道具的価値をも認めないというステイッチの立場から構想されているということである。コーンブリスは、この立場を修正しない限り、認識的プラグマティズムは機能しないと批判する (Kornblith 2002, pp. 153-156)。本節では、コーンブリスの批判を検討することを足がかりとして、認識的プラグマティズムが備える含意を積極的に汲み出していきたい。

三・一 コーンブリスによる批判

ステイッチを批判するために、コーンブリスは、様々なトースターの中からひとつを選択して購入するという舞台を設定する。トースターの評価を行う場面を「T場面」と呼ぼう。簡単のため、私は幸福にのみ内在的な価値を見出すと仮定すると、認識的プラグマティズムに従うならば、私は幸福をもたらす期待値が最も大きいトースターを買うべきだということになる。

このT場面を突破するのに必要なのは、トースターの評価に関わる信念を形成する認識プロセスである。どのような認識プロセスを私は採用すべきだろうか。認識プロセスの評価を行うこの場面を、「P場面」と呼ぶことにし

よう。ここでは、利用できる認識プロセスとして以下の二種類が存在していることにする。一方は、真なる信念を生み出すプロセスであり、もう一方は、真理には貢献しないが、私が唯一の内在的価値を見出す幸福のみに資するプロセスである。

この二つの認識プロセスは、トースターの評価に関して大きく異なる信念を生み出すことになるという。前者が真なる信念を生み出すという仮定から、後者は真なる信念をたいして生み出さないと判断できるというのである。コーンブリスは、認識プロセスという言葉の代わりに認知システムという言葉を用いて次のように述べる。

すべての認知システムが、それらのシステムが効果的に実現するような（幸福などの）目的とは関係なく、全く同じ仕方でも推論や信念を、生み出すのだとしたら、奇跡であろう。さらに、もしそうなら、ステイチの立場からはその興味深さが奪われることになるだろう。なぜならば、ステイチは、真理に基盤をおく説明によって是認されるシステムとは全く異なるシステムを推奨しているはずだからである。それゆえ、ステイチに対して不公平になることなしに、以下のように想定することができるだろう。ステイチの認知的基準を満たすシステムは、全般的にあって、真ではないような信念を生み出す (Kornblith 2002, p. 154)。

確認しておく、真なる信念を生み出す認識プロセスを推奨しないというのは、ステイチが構成してみせる意味論の帰結として、恣意性や限定性ゆえに真理に価値を見出す根拠はないという議論を指している。コーンブリスのこの議論に関しては、最後に述べられている想定の妥当性に関して強い疑問が生じる。特に、幸福にのみ資するプロセスが生み出す偽なる信念とは、どのような信念を指すのか明瞭ではない。だが、検討は次に回すとして、コーンブリスの議論を続けよう。

T 場面で、真理に資する認識プロセスを用いれば、トースターの使用がもたらす帰結が、高い精度で明らかになるだろう。ここでは、トースターを用いることで幸福がどの程度手に入るのかということがわかる。それゆえ、真理に資する認識プロセスは、購入すべきトースターの選択に大きく寄与する。

しかし、ステイチは、こうした真理に資する認識プロセスではなく、幸福にのみ資する認識プロセスを推奨する。なぜなら、幸福にのみ内在的価値が見出されるからである。こうして、認知的プラグマティズムに従うならば、P 場面において選択すべき認識プロセスは、幸福にのみ資する認識プロセスだということになる。この場合に問題になるとコーンプリスが考えるのは、ステイチが薦めるプロセスによっては、われわれの目的がかなえられないということである。幸福にのみ資するプロセスは、真理に資するプロセスとは異なる信念を生み出すという想定に注目しよう。

幸福に資する認知システムは、トースターの評価という仕事に用いられたときには、個々のトースターを購入したときの本当の帰結が何であるのかを教えてくれない。かわりにそれは、何が購入の帰結であると信じるのが最も幸福であるのかということを見せてくれるのである。……結局のところそれは、すべてを考慮したうえで、われわれに利益をもたらしてくれるものを正確には教えず、われわれに利益をもたらしてくれると信じることによって最も幸福になれるものを教えてくれることになるだろう。……ポイントをほんの少し言い換える、幸福にのみ資するシステムは、どのトースターが本当にわれわれを最も幸福にしてくれるかということを見せてくれない。このように、真理を除外したうえで、われわれの利益総体によって認知システムを決定しようとすることは、認知的領域の外部における、われわれの利益に資する選択を行う能力を切り崩してしまうのである (Kornblith 2002, p. 155)。

幸福にのみ資するプロセスは、トースター購入の本当の帰結を教えてくれるものではない。なぜならそれは、幸福には資するが偽なる信念ばかり生み出すからである。結局のところ、スティッチの推薦する認識プロセスを使用しても、それはわれわれの目的や関心に実際に益するものではなく、目的や関心に益するものが何であると信じれば幸福になれるか、ということを明らかにするだけなのである。そうであるならば、真理を除外し、それ以外の価値の総体（ここでは幸福のみ）に基づいて認識プロセスを評価しようという認識的プラグマティズムは、目的の実現を導く選択を阻むものであるといえるだろう。

認識的プラグマティズムに従うならば、T場面では、幸福に資するようなトースターが選ばれるべきである。また、P場面では、幸福に資するような認識プロセスが選ばれる。しかし、幸福にのみ資する認識プロセスを用いてT場面における課題を果たそうとすると、最も幸福に資する度合いが大きいトースターを選択することができない。したがって、認識的プラグマティズムは、内在的価値の獲得に貢献しないことがあるという結論が導かれる⁽¹⁷⁾。

以上のようなコーンブリスの議論には不明確なところが少なくない。特に、「スティッチの推薦する認識プロセスを使用しても、それはわれわれの目的や関心に実際に益するものではなく、目的や関心に益するものが何であると信じれば幸福になれるか、ということを明らかにするだけなのである」という結論がどのように導かれたのかを理解することはきわめて難しい⁽¹⁸⁾。しかし、ここで見ておきたいのは、コーンブリスの批判の妥当性よりも、それが認識的プラグマティズムに対してもつポイントである。

目標を実現し欲求を充足させるためには——たとえ真理に内在的価値を見出さないのであっても——真理に貢献する認識プロセスを好むプラグマティックな理由が存在すると、コーンブリスは説く。なぜなら、真理にいつさい資することのない認識プロセスは（コーンブリスの議論が正しいとすれば）、内在的価値の獲得に貢献しないからである。逆にいうと、内在的価値の獲得に貢献する認識プロセスは、真なる信念を生み出すものでなくてはならな

い。こうして、真理に道徳的価値が見出されることになる。それゆえ、認識的プラグマティズムを維持するには、その主張を弱め、真理を産出するプロセスを推奨するような認識評価の方法を採用するべきだというわけである。

三・二 批判の検討——認識は状況内での行為とともに

コーンブリスの批判には、議論上の問題点がいくつか存在すると思われる。以下では、認識的プラグマティズムを擁護する方向で、最も重大な問題点を取り上げて検討し、それを通じて認識的プラグマティズムの内実を明らかにすることを試みる。

なぜ、コーンブリスは、幸福にのみ資する認識プロセスが幸福に資するトースターの選択を導かないと考えるのであろうか。振り返っておくと、このような認識プロセスは

(1) トースターについての真なる信念をほとんど生み出さない

(2) 信じれば幸福になれるような信念を生み出す

という機能をもつ。コーンブリスによると(1)は、ステイッチが真なる信念に価値を認めないということから当然に立ててよい前提だという。さて、(1)から、われわれは、個々のトースターの選択がもたらす結果を正しく知ることができない。つまり、どのトースターが最も幸福に貢献するのかわからない。その結果、この認識プロセスは最も幸福に貢献するようなトースターの選択を導かないということが帰結する。一方で、(2)より、この認識プロセスによって、信じれば幸福になれるような信念を形成することができる。だが、その信念は、(1)から導かれた結論により、最も幸福に貢献するトースターの選択には結びつかない。すると——どのような

仕方であるのかは不透明だが——幸福に資するトースターの選択には結びつかないにも関わらず、信じれば幸福になるような信念が形成されるということになる。このことは、自らの内在的価値を獲得するために選択を行うことができるというわれわれの能力の足場を崩すことになる、とコーンプリスは結論する。

しかし、この議論にはいくつか疑わしいところがある。まずは、(2)から攻略しよう。(2)には「幸福になれる」という文言があるが、その幸福は、どの時点での幸福を意味しているのだろうか。幸福は、時点に基づいて、信念を形成した時点で得られる幸福と、形成された信念によって導かれた行動がやがてもたらす幸福とに大別できるだろう。両者はそれぞれ、短期的に得られる幸福と、長期的に得られる幸福と表現することもできる。ただし、これは、明確な境界線を引くことができない相対的な区別でしかない。

コーンプリスが(2)で言及しているのは、短期的すなわち信念を形成した時点に限られているように思われる。ここには、二つの問題を見出すことができる。

第一に、短期的な視点だけから内在的価値の獲得について論じるのは、プラグマティズムに対する理解の不十分さを示している。なぜなら、プラグマティズムが採る帰結主義は、短期的のみならず長期的にも獲得される価値にも配慮していると考えるのが自然だからである。

第二に、信念を形成した時点で幸福が得られ、かつ、その信念が幸福をもたらすトースターの購入という行為に結びつかないのだとしたら、それは以下の(a)(b)のような場合であると解釈し直すこと可能である。そして、この再解釈によって批判をかわすことができるようになる。

(a) はじめに、私が内在的価値を見出しているのは幸福のみではなかった、あるいはそもそも幸福に内在的価値を見出していなかったという可能性がある。幸福以外に内在的価値を見出しているものが存在すれば、幸福に資するトースターが選択されないということもあるだろう。こうした、内在的価値に関する判断が変更されるとい

事態は、さまざまな行為を通じて、自分が何に価値を見出し、何を目的として行動しているのかが徐々に明らかになっていくという過程として生じることだろう。そして、これはむしろ現実的な行為ないし認識のあり方を描いているのではないだろうか¹⁹⁾。これを思考実験に当てはめると、幸福に貢献しないトースターの購入という行為により、私は幸福のみに内在的価値を認めているわけではなかったということが事後的に判明するのである。ここには、スティッチ批判に直接的に結びつくものは何もない。

(b) 次に、トースターの購入は、少なくとも当該の場面においては、幸福の実現とは無関係だったという場合がある。今度は、行為の過程で、あるいはその結果として、トースターの購入を目的実現のための選択肢に数え上げたのが誤りだったということが後から分かるという場合である。つまり、最初に自分が置かれていた状況の把握に失敗していたということであり、幸福に資する認識プロセスが幸福の実現に役立たなかったということではない。

この(a)(b)で示された論点は、長期的な場合、すなわち、形成された信念に導かれた行為によってやがて幸福がもたらされるとい場合にも直接つながる。最も幸福に資する認識プロセスによって形成された信念は、最も幸福に貢献するトースターの購入という行為を導く。そして、プラグマティズムが一般に想定しているのはこうしたケースだと思われる。この場合に、トースターが購入されないのだとしたら、幸福のみに内在的価値が見出されているわけではなかったか、あるいは、トースターの購入は幸福の実現とは関係がなかったと判断するのが妥当であろう。ここでもコーンプリスのスティッチ批判は不当だったのである。

以上の検討を経たうえで、トースターの購入という行為が導かれる経緯を捉え直そう。まず、幸福という内在的価値の実現に目的が設定され、次に、現在の自分が置かれている状況、すなわちその場面における予算・時間・技術・能力などが把握される。その結果、目的の実現のために選択可能な行為として、トースターの購入が浮上する。そして、トースターの評価を行い、その中で最も幸福に貢献するものを購入すればよいのである。トースターの評

価値の時点で、幸福にのみ資する認識プロセスを用いると、最も幸福に貢献するトースターが選択されるだろう。もしも、こうした選択がなされないのだとしたら、それは、目的の設定や状況の把握に誤りがあったということを示しているのである。

われわれの認識は、一定の前提から結論を演繹して終わるような直線的な過程であることはまれであり、ほとんどの場合、状況内部での行為の進行とともに繰り返し目標設定や状況の把握に立ち返りながら展開していく。コーンブリスは、状況超越的・主知主義的な認識観に深くとらわれ、認識のもつ状況内的・行為相即的・動的性格に思いが及ばなかったがために、幸福に資する認識プロセスを用いても幸福を獲得することができないというほとんど謎めいた主張をするに至ったのである。

コーンブリスの議論が(1)を立てている点でも妥当性を欠くことを明らかにしよう。真なる信念を生み出す認識プロセスならば、最も幸福に貢献するトースターの購入という行為を導くような信念を形成する、というのもっともである。すると、ここまでの議論から、真なる信念を生み出す認識プロセスも、幸福にのみ資する認識プロセスも、同一の帰結をもたらす信念を形成しているということになる。したがって、コーンブリスがステイッチに対して不公平にはならないとみなしている(1)という前提——幸福にのみ資する認識プロセスは真なる信念を生み出さない——は成り立っていないのである。

だが、このようなステイッチ擁護は、返す刀をステイッチ自身に向けることになる。真なる信念を生み出す認識プロセスも内在的価値にのみ資する認識プロセスも、同一の帰結をもたらす信念を形成するという事態を、ステイッチはどのように考えるべきなのだろうか。少なくとも、ステイッチが真理を全く省みないという点には、何か問題があるのではないか。われわれは、認識的プラグマティズムと真理の関係を吟味しなければならないのである。

三・三 認識的プラグマティズム・共同体・真理

コーンブリスのステイッチ批判が不完全であるということは十分に確認できた。しかし、その批判中、真理に全く貢献しない認識プロセスによっては、個々の場面における制約を明らかにすることができないということを論拠にして、真理に道徳的な価値があると述べる箇所には検討の余地がある。簡単のために、目的の設定あるいは内在的価値の確定と場面ごとの制約の明確化とを合わせて、「問題状況の把握」と呼ぼう。以下では、コーンブリスの批判を汲む形で次の問いを検討したい。すなわち、真理には全く貢献せずに幸福にのみ資する認識プロセスに基づいて問題状況の把握を行うことは可能なのだろうか²⁰⁾。この問いを起点として、認識的プラグマティズムと真理との関係に迫ることができる。

確認すると、既に見たように、幸福にのみ資する認識プロセスを用いた場合でも、目的を実現することが可能である。ただしこれには、行為の過程で問題状況の把握についての判断に変更が生じる場合を除くという留保が付く。そして、その留保に対しては、認識的プラグマティズムの立脚点を揺るがすのではなく、むしろわれわれの認識と行為の実相を示すものだという積極的な評価を与えることが可能である。

この留保からは、重要な教訓を引き出すことができる。問題状況の把握に関しては、それが可能か不可能かという問い方を避け、うまくいっていたのかどうかを問わなくてはならないのである。結果的に目的の実現に結びついたときには、問題状況の把握は成功裡になされ、そうでないときには、失敗していたと判断すべきなのである。

幸福にのみ資する認識プロセスが、幸福をもたらす行動を導く信念を形成するならば、問題状況は適切に把握されていたことになる。そうではないのならば、問題状況の把握に失敗していたことになる。こうしたことから、個々の場面での行為が実際に進行しない限り問題状況の把握の成否は確定しない、ということが結論づけられる。それゆえ、実際の行為の進行について何も言及しないコーンブリスの批判は成立しないのである。ここでも、認識が状

況内部での行為と密接に結びついていることを忘れてはならない。

これは、次の批判を招くかもしれない。問題状況の把握の適切性が事後的にしか分からないのだとしたら、認識的プラグマティズムは無効になるのではなからうか。つまり、認識評価には問題状況の把握が必要となるが、その問題状況の把握がうまくいっているか否かは前もって判明せず、そのため、不確実な基盤の上で認識評価を行うことになるのではないのか。すると、認識的プラグマティズムの推薦する認識プロセスにも信用が置けなくなるように思われる。

それでも、認識的プラグマティズムは規範的役割を失うわけではない。というのも、問題状況の把握はあとで修正されるかもしれないが、現時点で採用すべき認識プロセスを推奨するという忠告的な役割を果たすことは可能だからである。そして、繰り返しになるが、問題状況の把握に関するこうした事態は、認識的プラグマティズムにのっとった行為が現実的な過程をたどるということを意味しているに過ぎず、認識評価が不可能であることを示唆するものではないのである。

ところが、認識評価の出発点に関して、さらに重大な問題が存在している。ここで重要なのは、認識的プラグマティズムに基づく認識評価を行うためには、事前に問題状況の十分な把握が確保されていなくてはならないということである。すなわち、認識評価には、行為に先立って利用できる信念集合が要請される。このとき、内在的価値の獲得に最も貢献する信念集合が利用可能であると想定してしまうと、論点先取のおそれが生じる。なぜなら、どのようなものに内在的価値を見出しているのかを明らかにするという作業は、問題状況の把握に含まれているからである。すると、認識的プラグマティズムは、出発点にも立てないのだろうか。

この問題に対して、私は、認識を共同体の内部に捉えることで解決とする。個人は、属している共同体によって現在のところ様々な目的のために役立つとみなされている信念集合（に加えてそれらとうまく一致するような信念）

を用いれば、ひとまずの出発点に立つことができる。例えば、科学や社会制度にまつわる信念が、多くの目的の達成のために有用だろう。私がいいたいのは、自分が内在的な価値を見出しているものが何であるかが確定しない段階でも、共同体の中で様々な目的に役立つとされている信念集合をもとにして、問題状況の把握を開始することが可能だということである。われわれは、コーンブリス批判を通じて、認識が状況と行為を離れてはありえないという心を刻んだが、次にわれわれは、認識が共同体という土壌に根を張っていることを思い起こすべきなのである。

共同体に蓄積されているこうした信念を、「真なる信念」と呼ぶことは至当であろう。このように多様な目的のために役に立つ信念を真なる信念と呼ぶのは、プラグマティズムの古典的な真理観に合致する。

いま引き出された、真なる信念とはさまざまな目的のために役立つと共同体の中で認められストックされている信念である、という結論を敷衍していこう。そのために、認知的プラグマティズムが提示する枠組みの中で、真なる信念が機能する姿を描き出したい。

共同体の中に生まれた個人は、多くは教育という形で真なる信念集合を受け取る。共同体は、いろいろな目的をかなえることを手助けするものとして、内在的な価値に関する信念や、使用するべき認識プロセスを教え込む。個人は、例えば、内在的価値についての信念として、人命は何よりも尊重すべきであるとか、青年は職業によって自己実現を果たさなくてはならないとかいった信念を抱くことになるのである。そして、その信念集合に基づいて、また身に付けた認識プロセスを使用することによって、自分が現在置かれている状況についての把握を行い、行為を展開していくことができるようになる。その後、自分のなした多くの行為の帰結を見るにつれ、自分が本当に内在的な価値を見出しているものは何なのかということが明らかになってくるだろう。その結果、内在的価値に関する信念の改訂が行われることになる。例えば、職業によらずとも奇石の収集で自己実現を果たすべきであるといっ

たふうに信念が変更されるのである。

認識的プラグマティズムが活躍するのはここである。個人は、問題状況の把握がある程度まで進んできている。ここまでくると、認識的プラグマティズムに従って、共同体から伝授されたとりあえずの認識プロセスを、自分にとっての内在的価値に資するより優れた認識プロセスで代替することができる。そして、採用すべき認識プロセスが決定されれば、それによってさらなる問題状況の把握が可能になる。もちろん、その認識プロセスによって形成された信念に導かれてなされた行為がもたらす結果次第では、問題状況の把握がうまくいっていないかったということが判明するかもしれない。しかし、それは再び信念の改訂が行われる端緒になるだけで、否定的な事態を表しているというわけではない。

このようにして、各個人は、自分の内在的な価値に資する認識プロセスを採用し、目的の達成に役立つ信念を形成していくことができる。そして、形成された信念の中には、多様な内在的価値の獲得に貢献するものが存在するだろう。例えば、医学に関わる信念は、健康に内在的価値を認める人間にも、高い社会的地位に内在的価値を見出すがゆえに医師を目指している人間にも役立つ。こうした信念は、共同体の中にストックされて、教育によって次世代に引き継がれる。これがすなわち、真なる信念集合である。逆に、個人の趣味的で奇妙な内在的価値にのみ貢献するような信念ないし認識プロセスは、次世代に引き継がれることなく廃れていくのが普通であると思われる。これは、先人たちが作った道路や学校は、共同体に残されて、あとの世代が様々な用途に使うことができるのに対し、特定の個人の内在的な価値にのみ貢献するもの（奇石のコレクションなど）は共同体に保存されずに遺棄されるという事態と同種の事態とみなしうる。

さらに、真理がこうしたものであるならば、「真である」という語は、ある共同体の中で有益とされる信念に対する賞賛の言葉として働いていると考えることもできる⁽²⁾。そして、賞賛の対象となった信念は、そのことによっ

て、共同体の内部で伝達されやすくなるだろう。真であるという評判が立った信念には、多くの人が飛び付くというわけである。

以上のように、「真なる信念」は、多種多様な目的を達成するために共通して役立つ信念をまとめて表現し、共同体の内部で伝達するためのカテゴリーなのだといえるだろう。そして、こうした信念を学び身に付けていることが、多様な内在的価値をもつ諸個人が認識的プラグマティズムののちとして認識評価を行い、自らの内在的価値に最も貢献する認識プロセスを採用することを可能にする。

ここでは、真なる信念が道徳的価値をもつということは自明である。真なる信念は、さまざまな目的のために役に立つと共同体の内部で是認されているものだからである。そして、役に立たないものは、真なる信念と呼ばれることはない。すると、三・二の最後に登場した疑問——幸福にのみ資する認識プロセスが真なる信念を産出する事態をどのように捉えればよいのだろうか——に対しては、次のように答えることが可能になる。すなわち、幸福にのみ資する認識プロセスは、幸福という目的のために役立つ信念を生み出す。そして、同じ信念が、ほかの人間が内在的価値を見出すようなものをもたらずののだとして共同体の中に既にストックされていた信念集合に見出されるときには、それは真なる信念だと認定されるのである。

このような描像のもとでの真理は、人間とは独立に存在する不変的な何かではなく、歴史的で偶然的なものである。というのも、真理は、これまでに共同体の成員がどのようなものに内在的価値を見出し、どのような状況に置かれてきたかということとは独立ではありえないからである。そして、現在のところ真であるときみなされている信念が、状況の変化に伴って、将来的により役立つものになったり無益になったりもするという点で、真理は固着することなく変転し続けるものだといえるだろう⁽²²⁾。

結論をまとめよう。認識的プラグマティズムが分析的認識論を凌駕しているのは、認識的規範の重要性を説明し、有効な知性改善論を提示しようという点に求められる。特に、認知多元主義は、個人と個人が置かれた状況に即した知性のあり方を考察すべきだと教える。認識的プラグマティズムに向けられたコーンブリスの批判の検討を通じ、認識の現実的な過程を常に考慮し、実際の行為の進捗とともに問題状況の把握の成否が明らかになっていくものだと考えるべきだという教訓が得られる。われわれは、状況内部での行為実践の場において認識を捉えなければならぬのである。さらに、認識的プラグマティズムは、認識が共同体に由来することにも目を開かせる。個人は、種々の目的に有用であるとして共同体が収蔵し教授する信念集合を基盤として認識評価を開始し、問題状況に関する信念を改訂していく。そして、個人が新しく形成した信念の中には、諸目的のために役立つとして共同体にストックされ、次世代に伝えられるものも存在する。こうした信念は、プラグマティズムの古典的な真理観に基づき、真なる信念と呼ぶことが可能である。真理をこのように捉えることは、真理に局所的で偶然的で非固定的な性格を認めるということであり、普遍的な不滅の真理という従来の真理観への反省を促している。

以上の議論が妥当だとすれば、認識論は、認識の観想主義から状況内行為主義へ、また、認識の個人主義から共同性・歴史性という観点への移行を迫られているといえるだろう。そして、認識的プラグマティズムに基づく知性改善論は、こうした新たな局面においてさらに精緻な形で構想されなくてはならないのである。

註

(1) 認識論の記述的側面と規範的側面との区別に関わる問題は、認識論の自然化をめぐる文脈で先鋭化してきた。認識論の自然化は、Quine 1969において唱えられたが、ここでは認識論は経験心理学の一分野としての地位に納まると述べられており、この主張は認識論には記述的課題は残されるが規範的課題は放棄されていると述べているようにも読める。これに対しては、もしも認識論が規範的側面を完全に失ってしまったならば、それは探求領域を変えてしまったのであって認識論とは呼びえない。

- ないといった批判が提起され (Kim 1988 など)、またクワイン自身も規範的認識論を工学になぞらえる視点を提示しており (Quine 1986)。現在では、規範的側面なしで認識論が可能であると考える論者は、管見によれば見当たらない。
- (2) 分析的認識論を擁護する論者 (例えばゴールドマン) も、分析的認識論を批判する論者 (スティッチやコーンプリス) も、この前提に立つ。しかし、信原は、直観的判断はコネクショニズムによって描かれる過程であり、概念分析を日常的判断のうちで暗黙的に含まれる直観を理論的に明示化する作業だとする考え方を批判している (信原 2005)。これは注目に値する批判であるが、認識的プラグマティズムと衝突するものではなく、ここで検討している余裕もないので、今後の考察にゆだねることとした。
- (3) 「分析的認識論」という語とそれに対する批判は Stich 1988; 1990 (特に ch. 4) に依拠している。また、概念分析批判は、Kornblith 1999 においても展開されている。
- (4) 認識的規範に関わる概念的な核がそもそも存在しないために概念分析が機能しないという場合も想定できるが、たとえ概念分析が成功したとしても、以下のような困難がさらにも出現するわけである。
- (5) Goldman 1986, ch. 4 および ch. 5。ゴールドマンは「反省的均衡 reflective equilibrium」を用いて信頼性主義のメタ正当化を試みている。反省的均衡という語は Rawls 1971 に由来するが、その考えについては Daniels 1979; 1980 が詳しい説明を与えている。
- (6) Churchland 1987; Elgin 1988; Field 1982; Lycan 1988 などを見よ。逆に、認識の目的に真理を設定したものとしては、既述の Goldman 1986 における信頼性主義のほかに Bonjour 1985; Quine 1986 などが著名である。
- (7) ポスト分析的認識論の他の形態として Kornblith 2002, ch. 2 において提唱されている、認知行動学の知見に基づいて知識を自然種として探求しようとするリサーチ・プログラムが注目に値する。
- (8) さらにいうと認識的プラグマティズムは、自然化された認識論の一形態でもある。それは、以下で見るように、認識的プラグマティズムが提示する認識プロセスの評価基準は、目的を達成する際の費用―便益、個人が置かれた状況、個人に課される制約といったものに関する経験的知識とは独立に確定されないからである。なお、注7で触れたコーンプリスのリサーチ・プログラムも、自然化された認識論の一形態である。
- (9) プラグマティズムを認識論に適用した場合、こうした帰結主義的観点を探るのが自然であると思われる。しかし、ハーマンは、スティッチに対するコメントにおいて、プラグマティズムに賛意を示しつつも、認識論においては、認識的保守主義

を採るべきだと述べている (Harman 1991)。これは、おそらくジェイムズやクワインが述べる、信念に関するわれわれの自然な傾向としての保守主義に従うべきだという意味であろう。しかし、そうすべき理由ははっきりせず、また、その場合、どのようにして認識評価の基準を改訂することによって知性改善を試みればよいのかも明らかではない。

- (10) 認識的プラグマティズムが、ここで提示されたような費用便益分析を採用すべき決定的な根拠はない。こうした分析方法が、実際の道具や技術の評価あるいは人間の価値意識のあり方などと乖離したものであれば、実態に即した修正を行うべきであろう。Sich 1990, pp. 132-134 を見よ。

- (11) スティッチは、費用便益分析における費用について詳しく議論しないが、その一方で、実行可能性については独立して論じている (Sich 1990, pp. 152-156)。しかし、実行可能性の問題は、ここで述べたような仕方では、費用の観点に収容できると思われる。

- (12) 実行可能性に関しては、Cherniak 1986; Harman 1986 をも参照。

- (13) 探求において、問いの現金価値、すなわち問いへの回答の結果としてわれわれが起こす行動について明らかにすることの意義を強調するのもプラグマティズムの重要な主張である。

- (14) 知性改善については、コーンプリスも、われわれの信念形成のメカニズムに関する経験的探究なしに有効な認識的アドバースを獲得することはできないとしている (Kornblith 1999, p. 163)。

- (15) この結果、人間の日常的な推論が論理学に基づく規範からは逸脱しがちであるという心理学上の実験結果 (cf. Johnson-Laird & Wason 1972; Kahneman, Slovic & Tversky eds. 1982) についての解釈を与えることができる。個人ごとの制約を考慮し獲得可能な認識プロセスを限定した後ならば、人々の日常的な推論は論理学に基づく規範に従わなくとも、プラグマティックな観点からは (例えば短時間で済むという点で) なかなかの評価を勝ち得るかもしれない。

- (16) このように探求方法の改善を際限のない過程として捉える描像は、デューイがしばしば提出するものであった (例えばデューイ 1980、四〇四―五ページ)。これとは逆に、コーンプリスは、知性改善はやがて収束すると考えている (Kornblith 2002, p. 157)。こうしたコーンプリスの考えに呼応するプラグマティストを挙げるならば、真理を探究の収束点として捉えるバースであろう。私は、知性改善が収束する地点があらかじめ存在していると考えない理由はないと考えるので、スティッチならびにデューイに共感を覚える。

- (17) ハーマンも同趣旨のスティッチ批判を行っている (Harman 1991)。しかし、コーンプリス、ハーマンともに、注6で述べ

- たような論者やステイチチが示すような真理に対する疑念を深刻に受け止めておらず、そのため真理を十分に吟味していないのが両者の弱点である。とくにコーンプリスは、進化論的議論を援用した信頼性主義を採用する (Kornblith 2002, pp. 52-69) が、そこで用いられている真理概念の内実あまり明瞭とはいえず、信念が真であるということを生存に役立つゆえに自然選択をくぐり抜けてきたという意味で) 正当化されているということと独立に捉える理由は示されていない。私は、コーンプリスの真理概念は、本文で示されたような古典的プラグマティズムの真理観に収容されるものであると考える。
- (18) この引用部分で省略した箇所には「幸福にのみ資するシステムは、われわれが価値を見出しているものについても正確には教えてくれないだろう。かわりにそれは、われわれが価値を見出していると信じることによってもっとも幸福になれるようなものを教えてくれるのである」という部分があるが、この思考実験においては、幸福に内在的な価値を見出すということが前提にされていたはずなので、この文章は、少なくとも説明不足、場合によっては明らかな誤りである。
- (19) こうした認識観・行為観に親近性をもつものとして、Sudman 1987 が挙げられよう。しかし、われわれの行為の実相がこれに近い面をもつにせよ、認識的プラグマティズムは、サッチマンが称揚するようないわば自転車操業的な行為とは異なる種類の行為の領域をも確保しなくてはならない。それは、実行可能性ならびに各種の制約を把握し、計画を立てて実行していくという種類の行為であり、これなしには規範的認識論としての認識的プラグマティズムは機能する場を失うだろう。だからといって、伝統的な主知主義的ないし観想主義に戻れというわけではもちろんない。
- (20) コーンプリスのステイチチ批判にはこうした疑問も含まれているはずであるが、注18で述べたような混乱が見られるので、ここで改めて問いを立てることにした。
- (21) ローティは、プラグマティズムの真理観において認めるべき(そしてこれ以上認めるべきではない)「真である」という語の用法として、警告的用法と引用符消去的用法、そして賞賛的・是認的用法を数えている (Rorty 1986)。こゝでは、賞賛的・是認的用法の由来および働き方に関して、部分的な説明を与えることができたと思われる。
- (22) すると、ステイチチは、真理概念の恣意性や局所性を強調した点では正しかったといえる。しかし、一定の恣意性や局所性を伴うにせよ、真なる信念は、認識的プラグマティズムを可能にする端緒を開くという点で、道具的な価値を有しているのであるから、これによって、コーンプリスのステイチチ批判は一部で妥当すると考えられるのである。また、ステイチチによっていったん斥けられた概念分析や反省的均衡には、少なくとも認識的プラグマティズムが根を張る大地(共同体内に蓄積された諸信念)の性格を明らかにする方法として活躍の場を与えることができるだろう。

文獻

- Bonjour, L. (1985), *The Structure of Empirical Knowledge*, Harvard University Press.
- Cherniak, C. (1986), *Minimal Rationality*, The MIT Press.
- Churchland, P. S. (1987), "Epistemology in an Age of Neuroscience", *Journal of Philosophy*, 84, pp. 544-533.
- Daniels, N. (1979), "Wide Reflective Equilibrium and Theory Acceptance in Ethics", *Journal of Philosophy*, 76, pp. 256-282.
- (1980), "Reflective Equilibrium and Archimedean Points", *Canadian Journal of Philosophy*, 10, pp. 83-103.
- ト・ホ・マ・ー・ク (1980) 『無頭論——終末の無頭』 徳島大学出版部 『世界の名著』 17巻 57号 『ト・ホ・マ・ー・ク』 中央公論社
- Elgin, C. Z. (1988), "The Epistemic Efficacy of Stupidity", *Synthese*, 74, pp. 297-311.
- Field, H. (1982), "Realism and Relativism", *Journal of Philosophy*, 79, pp. 553-567.
- Goldman, A. I. (1986), *Epistemology and Cognition*, Harvard University Press.
- Harman, G. (1986), *Change in View: Principles of Reasoning*, The MIT Press.
- (1991), "Justification, Truth, Goals, and Pragmatism: Comments on Stich's Fragmentation of Reason", *Philosophy and Phenomenological Research*, 51, pp. 195-199.
- Johnson-Laird, P. N. & Wason, P. (1972), *Psychology and Reasoning: Structure and Content*, Harvard University Press.
- Kahneman, D., Slovic, P. & Tversky, A. eds. (1982), *Judgment under Uncertainty: Heuristics and Biases*, Cambridge University Press.
- Kim, J. (1988), "What is 'Naturalized Epistemology'?", in Kornblith, H. ed. (1994), *Naturalizing Epistemology*, 2nd ed., The MIT Press, pp. 33-55.
- Kornblith, K. (1999), "In Defense of a Naturalized Epistemology", in Greco, J. & Sosa, E. eds., *The Blackwell Guide to Epistemology*, Basil Blackwell, pp. 158-169.
- (2002), *Knowledge and its Place in Nature*, Oxford University Press.
- Lycan, W. G. (1988), *Judgment and Justification*, Cambridge University Press.
- 信原幸弘 (2005) 『「直観」の無頭論』 『哲学時評』 Vol. 32-2 春十号 113-161 146頁
- Quine, W. V. O. (1969), "Epistemology Naturalized", in *Ontological Relativity and Other Essays*, Columbia University Press. (邦訳)

- 伊藤春樹訳、「自然化された認識論」、『現代思想』Vol. 16-8 青土社（四八一―六三頁）
- (1986), "Reply to Morton White", in Hahn, L. E. & Schilpp, P. A. eds. *The Philosophy of W. V. Quine*, Open Court, pp. 663-665.
- Rawls, J. (1971), *A Theory of Justice*, Harvard University Press. (邦訳 矢島鈞次監訳 『正義論』一九七九年 紀伊国屋書店)
- Rorty, R. (1986), "Pragmatism, Davidson, and Truth", in LePore, E. ed., *Truth and Interpretation: Perspectives on the Philosophy of Donald Davidson*, Basil Blackwell. (邦訳 富田恭彦訳 『プラタマティズム・テイヴィドノン・真理』『連帯と自由の哲学』——二元論の幻想を超えて』一九九九年 岩波書店 所収)
- Such, S. (1988), "Reflective Equilibrium, Analytic Epistemology and Cognitive Diversity", *Synthese*, 74, pp. 391-413.
- (1990), *The Fragmentation of Reason*, The MIT Press.
- Suchman, L. A. (1987), *Plans and Situated Actions*, Cambridge University Press. (邦訳 L・A・サッチマン 『プランと状況的行為』——人間―機械コミュニケーションの可能性』佐伯胖監訳 産業図書 一九九九年)

*この論文は文部科学省科学研究費補助金による研究成果の一部である。